

本一冊で事足りる 異世界流浪物語

YUKI KARAKU
結城絡繰

7

主な登場人物

鬼男

「不死の血統団」幹部。
獐猛な性格の鬼の化け物。

アンネ

「不死の血統団」幹部。
妖艶な色気を纏う吸血鬼。

獅子男

「不死の血統団」幹部。
獅子の獣人。
剣を扱うのが得意。

ミササギ・リョウ

異世界に転生した読書好きな高校生。
万物を具現化できる「無限召喚本」を手に、
世界中に散らばった〈神製の本〉を
回収する旅に出る。

サラ

「不死の血統団」幹部。
団長の側近。おっとりとした性格。

トクメー

ミササギが〈擬態〉によって
変身した女性の姿。

謎の少女

「不死の血統団」の地下施設に
隠れるように住んでいる。

ジュリア・ストリギン

ミササギと同じ転生者だが、
種族は屍食鬼。不死身。



1 地下牢獄^{あうごく}

じめじめとした陰気な空間。

その中で俺、^{みさきりよう} 陵陵は終わることのない苦しみを味わっている。
布で目隠しされたせいで視界は闇に包まれ、椅子^{いす}に座らされたまま手足の自由は利^きかない。感じられるものと言えば、延々と繰り返される罵倒^{ばう}と痛みだけ。

ともすれば気の狂いそうな状況にて、俺はただ生かされていた。

「所属は？ お前は何者なんだ」

投げかけられたのは、聞き飽きた質問。

相手は俺が素直に答えるとも思っているのだろうか。愚^{おろ}かしいとしか言いようがない。だから、俺は薄く笑って返事をする。

「何度も何度もしつこいな。私^{わたし}はただの放浪者。それ以外に話すことはない」

「お前こそ同じような答えではぐらかしやがって、いい加減にしろ！」

激痛^{えく}が俺の頬を抉^{えく}る。どうやら殴られたらしい。

衝撃で平衡感覚を失い、微かな嘔吐感を覚えたが、しかし、もはや慣れたものであった。

今日だけで何度殴られたのか分からない有様なのだから、今更その回数が増えたところで大したことあるまい。

口内に滲む鉄臭い味を吐き捨て、俺は深い溜息を漏らす。

(まったく、災難にもほどがあるね……)

謎の魔法陣に捕らえられ、拘束されたのが三日前。

それから、ひたすら拷問と尋問の繰り返しである。

連中——おそらくは町で噂になっていた「不死の血統団」と呼ばれる組織だろうが、奴らは俺に相当な興味があるようだ。

名前や素性をしつこく問われただけでなく、挙句の果てにはどこから来たのだと尋ねてくる始末。自分たちが拉致してきた癖にそんな風に聞くのはおかしい気がするが、そこを指摘するとやはり殴られた。尋問する男曰く、俺には質問する権利はないらしい。

それにしても、連日暴力を受け続けてきたダメージは大きい。

殴る蹴るといった比較的軽い暴力が大半だったが、それでも延々と続けられると、その蓄積は軽視できない。

かなりの血が流れ出たのだろう。既に俺は生存困難な状況へと近づきつつあった。

俺に暴力を振るう男もそれを察したらしく、近くにいたもう一つの気配に告げる。

「増血剤を持つてくるから見張っておいてくれ。こいつに死なれて困るのは俺たちだ」

「了解した」

声からしてもう一人も男だろう。暴力男は足音と共に去っていく。

俺はそつと肩を竦めた。

(増血剤……過剰な薬物投与はやめてほしいなあ)

死に瀕しながらもこんなことを考えられるのは、精神的にまだ余裕があるからに違いない。

まあ、実際に余裕はある。ここで死ぬつもりは欠片もないし、俺をこんな目に遭わせた奴らは皆殺しにすると決めていた。あとは適切なタイミングで適切な行動に打って出るのみだ。それまでは辛抱するしかない。

いつの間にか暴力男は戻ってきたらしく、俺が虎視眈々と反撃の機会を窺う間も、苛烈な拷問は続けられた。

それにもかかわらず俺が致命傷を負わされていないのは、暴力男が効率よく痛めつける術を知っているからだだろう。

まさに生かさず殺さずというやつだ。非常に笑えない。



しばらくして、唐突に目隠しが剥ぎ取られた。
室内を淡く照らす光が目染みる。久々に開けた視界に首を振っていると、目の前の人物が尋ねてきた。

「まだ口を割らないか。そうまでして素性を隠したいのか？」

落ち着いた口調。どうやらいつもの暴力男ではないようだ。

瞬きする俺をよそに男は話を続ける。

「つまらぬ誇りが口を堅くしているのなら、すぐにでもそんなものは捨てた方がいい。あの脳筋男は貴様が有益な情報を吐くまでは絶対に諦めないだろうからな。奴はあれでも優秀な拷問官で、相手の感情を揺さぶるのが大の得意だ」

目が慣れてようやく目の前の男の姿がはっきりと見え始める。

そいつは獅子のような頭部を持つ獣人だった。鋭い目つきやムツとした表情からして、なかなか油断ならない性格なのが窺える。また「面倒だから早く終わらせたい」という気持ちも強く伝わってくる。目隠しを取ってくれたのもそういうわけなのだろう。

そういえば、拷問が始まってから一度も目の前の獅子男からは暴力を振るわれていない。こいつはただ質問だけをしてきた。獅子男は腕組みをしながら俺をじっと見つめるだけで、彼からは敵意もあまり感じられない。ひたすら事務的な印象だ。

これはある意味、チャンスかもしれない。今まで、この獅子男だけが残るといふ展開は滅多にな

かった。

この獅子男から「不死の血統団」に関する情報を抜き取ってやろうと俺は考えた。

呼吸を整え、俺はゆっくりと静かに問いかける。

「……今日はいつもの奴は来ないんだな？」

「所用があるそうだ。とりわけ急いでもいなかったから、少し待つことになるだろうな……それがどうかしたのか？」

獅子男の鋭い眼が俺を射抜く。

雰囲気から判断した危険度なら、あの暴力男よりも上だな。威圧感がピリピリと肌を刺激する。

ただ、そんな視線に晒されるだけの価値はあった。目の前の獅子男は、暴力男とは違い最低限の応答ができる性質だと判明したのだから。

第一関門は無事に突破した。ここからさらにこいつの性格に鑑みつつ攻めていく。

絶対零度の視線を堂々と受け止め、俺は逆に睨み返して告げた。

「取り引きしないか？ 乗るか乗らないかは、私の話を最後まで聞いてから判断してほしい」

一気に詰めた第二関門。

俺の推測が正しければ、獅子男は絶対に乗ってくる。

こいつは効率を求めるタイプだ。望まない仕事を任されて嫌気が差したという顔をしている。大方、さっさと俺への尋問を済ませたいのだろう。

表面上は涼しい笑みを崩さず、俺はじつと獅子男を見遣る。数秒後、答えは返ってきた。

「ほう、その身で交渉とは……面白い、乗ってやろう」

俺は内心でガッツポーズをする。

やはりだ。獅子男も拷問の早期終了を望んでいるのだ。

まだ油断はできないが、会話の主導権は握った。あとは流れに沿って進めていくのみだ。

俺は何食わぬ顔で説明を始める。

「私が質問をするから可能な限り答えてくれ。その代わり、私もそちらの質問には同じ数だけ答える。どうだ？ 互いに損をしない、実に効率的な提案だと思わないか？」

拷問は手っ取り早く、情報を引き出せる方法だ。しかし苦痛によって引き出せる情報にはどうしても限界がある。

獅子男は予想していた通りの反応を見せる。

「まさか尋問対象からそんなことを言われるとは思ってもみなかったが、貴様がそれで口を割るのなら何ら問題ない」

随分とあっさりとした本音だ。口調からして嘘偽りないというのが感じられる。よほど拷問や尋問といった作業が好きではないのだろう。

それはともかく、俺はさっそく獅子男に問いかけた。

「まず、私を捕らえて拘束したのは不死の血統団の仕業で間違いないか？」

「そうだ」

核心に迫った質問に対し、獅子男は素直に頷く。

俺はさらに詰めていく。

「もちろんそこにお前も含まれていると考えていいんだな？」

「ああ。ついでに言っておくと、さっきの脳筋男は幹部を任されている。貴様はそれだけ危険視されているということになるな」

淀みなく答える獅子男。

彼の様子を見ている限り、どうやら嘘をつく気はないようだ。よほど俺を甘く見ているのか。

次の質問を考えている間に、獅子男が先に口を開く。

「今度はこちらから尋ねてもいいか？」

ここをどう凌ぐかが問題であった。

本当のことばかりを言うわけにはいかないが、はぐらかすような返しを続けていると信頼を失う。そうなればこの取り引き自体が終わってしまうのだ。絶妙な加減を見極め、なんとか上手くやるしかない。

見下ろす冷たい眼と視線を合わせ、俺は乾いた唇を舌で湿らせる。

獅子男は落ち着いた声音で問うた。

「何度も聞いている質問だが、貴様の名前と所属を正直に教えてくれ」

やはりストレートに突っ込んでくるか。想定していた展開が的中したことに少しだけ嬉しく思う。まあ、ここはきちんと答えておこうかな。

「私の名はトクメー。どこにも所属していない放浪者さ」

嘘は言っていない。

実は、魔法陣で捕らえられた際に、瞬時にトクメーに変化していたのだ。

トクメーは、どこまでも無個性な人間である。この世界の全てと関わりがなく、完全に個人の事情によって活動しているからね。だから、どこにも所属していない放浪者というのも嘘ではない。

「ほう、今まで繰り返していた返答は本当のことだったのか」

「我ながら根っからの正直者だね。真実しか口にできないんだ」

獅子男が感心したように声を上げる。

嘘を言っても、おそらく見破られていただろう。トクメーとしての素性を偽りなく話したから、

獅子男も信じてくれたのである。

こういう武人タイプは騙すのが楽で非常に助かるよ。心理戦で相手を頭から信じるなど、煮詰めた砂糖並みに考えが甘い。信じるという行為の難しさをきちんと勉強することを推奨したいものだ。

内心で俺がほくそ笑むのも露知らず、獅子男は質問を続ける。

「では、貴様はどのような力を持っている？ 職業、スキル、戦闘スタイル……何もかもが不明だ。



ステータスを弄^{いじ}っているのか？」

これはまた核心を突く質問だ。

聞けるときに全部聞いてしまえという魂胆^{こんたん}なのか。確かに至極真つ当な選択と言えるね。俺は気が変わりやすいし。

しかし、これはどうはぐらかすか迷う。

ちなみに、ステータスの隠蔽^{いんぺい}や書き換えはチート本^{ほん}の能力である。俺が修正しない限り、表面上は間違った情報しか閲覧できないようになっていた。こいつらは俺が気絶している間にでもステータスを調べたに違いない。

無論、真実を伝えるのは論外なので、上手く誤魔化^{ごまか}す必要がある。

「どうした、約束は守ってもらうぞ？」

俺が言い淀んでいると、獅子男が少々強めの口調で念押ししてきた。

まずいな。怪しまれている。とにかく返答しなければならぬ。ここで疑いを持たれてしまうと、あとが面倒極まりない。

あくまでも平常心は崩さず、俺は獅子男を見る。

「なぜ私の能力を知らないんだ？ 私を狙^{ねら}って拉致^{らき}してきたのだから、私の力を知ったうえで利用するつもりだったんだろう」

「お前を攫^{さら}ったのは血統団としての事情だ。俺には貴様の力は分らないが、血統団には必要らし

い。それよりも、早く質問に答えろ」

時間稼^{かせ}ぎついでに探りを入れてみたが、見事にはぐらかされた。まあ、いい。この辺りもおおい判明するだろう。

仕方がないので、俺は淡々と俺の能力に関する情報を明らかにしていく。

「身体能力の強化と環境への適応力、あとは物造りの才能くらいだ。特技は殺人とでも言うっておこ
うか」

「その言葉に偽りはしないな？」

「当然だ」

暫^{しば}しの沈黙。視線が痛い。

今回も嘘は言わなかったので、たぶん大丈夫だと思う。

そうだと信じたかった。

最初の数秒は訝^{いぶ}しげな様子だったが、獅子男はそれ以上の追及をせずに黙り込んだ。どうやら俺の返答に偽りがないと判断してくれたらしい。

俺は内心でほっと安堵^{あんど}する。

こうして最初の相互質問は特に問題なく済ませることができた。

だが、まだ序の口である。

如何^{いか}にしてこちらの情報を提供せずに相手の情報を奪い取るか。かなり精神を削る作業だ。心理

戦ならこちらに分がありそうだという点は救いだけだね。

こちらの行動を待つ獅子男の意図を察し、俺は口を開いた。

「じゃあ、次は私の番だな」

「……いや、どうやら時間切れのようだ。思っていたよりも帰ってくるのが早かった」

ぴたりと動きを止めた獅子男が、囁き声で告げる。

耳を澄ますとコツコツと硬い石床を鳴らす足音が聞こえてきた。あの脳筋男が戻ってきたのだらう。残念ながら質問会はここでお開きらしい。

まったく、なんて間の悪さだ。俺ばかりが情報を出してしまったじゃないか。思わず愚痴を言いたくなるが、俺は努めて冷静になる。

（ひとまずこれくらいでいい……今は獅子男と一定の信頼関係を築けただけでいい。同じような機会は今日以降もあるはずだ……無駄に焦って台無しになる方がよっぽどまずい）

そう、別に今ここで情報を残らず抜き取らなくてもいいのだ。今日の収穫に味を占めた獅子男はきつとまた接触を図ってくる。相互質問という形式なら俺が喋ると分かったのだから、それに頼らない手はない。向こうが俺の問いかけに真面目に答えるかが問題だが、そこはあまり心配せずともいいだろう。不誠実な態度は、俺からの不信感を買うこととなる。獅子男だって馬鹿ではないだろうから、言動には気を遣うはずだ。

満足そうな微笑を浮かべる獅子男を見上げつつ、俺は今後の計画を脳内で練り直す。

俺の求める情報は、主に現在地と不死の血統団の活動目的である。前者が分かると脱出後の立ち回りを考えられ、後者が分かると俺が拉致された理由が予想できるからだ。

この二つが聞き出せた時点で、さつさと反撃を始めてもいい。ただし焦りは禁物。じっくりと確実に進めてやる。

2 脱出への道のり

朦朧とする意識の中、激しい罵倒と痛みが意識を引き戻す。

「まったく、いい加減吐きやがれッ！」

鋼のように硬い拳が俺の顎を捉えた。

軽い嘔吐感に加え、視界が二重にぶれて見える。

それにしても遠慮のない一撃だ。これで死んでしまったらどうするのだろう。

ぐらつく身体に力を込め、目の前の脳筋男を挑発してやる。こいつの姿を初めて目にする事になったが、牛のような頭をしていた。

「おっと、あまりにも温い拷問だから居眠りしていたよ。申し訳ないね」

「このっ——！」

怒り狂った脳筋男の蹴りが胴体にめり込んだ。

体内で骨が圧し折れる不気味な音が響く。

身体に巻かれた拘束用の鎖がダメージを軽減してくれるかと密かに期待していたが、そんな都合のいいことは起きなかった。

驚異的な膂力で繰り出された一撃により、縛られた椅子ごと壁際まで吹き飛ばされる。ぐるぐると勢いよく回る視界。苔の生えた石壁に激突し、全身の節々を強く打つ。

無防備な状態で受けた蹴りはかなり効いた。

塞がりかけていた傷口もあつさりと開いてしまい、そこから貴重な血が体外へと流れ出す。前世の肉体のままならとつきの昔に死んでいただろう。

牢獄の床全体にこびり付いたどす黒い染みを見て苦笑する。

「気持ちの悪い奴だ。痛めつけられて笑うなんてな」

脳筋男が俺を嘲笑う声がする。

他人に暴力を振るって何とも思わないとは、なんて非情な性格なのだろう。まあ、俺が言えた義理ではないだろうが、相応の報いを受けてもらわねばならない。

倒れた椅子に縛られた状態で呻いていると、脳筋男と獅子男の声が聞こえてきた。

「畜生が。今日も収穫なしかよ。仕方ねえ、一旦戻るか」

「ああ、同感だ。これ以上やって死なれると困る」

短い会話を終え、脳筋男が荒々しい悪態と共に遠ざかっていく。

俺はちらりと顔を上げて室内唯一の出入り口に目を向けた。

脳筋男に続いて去ろうとする獅子男が、意味ありげな目でこちらを見ている。

相互質問の件を覚えていたようだ。あとでこつそりと戻ってくるつもりなのかもしれない。

退室した二人を見送り、俺は深い溜息を吐いた。

（そろそろ我慢できなくなってくるな……）

四六時中こんな調子の環境に閉じ込められているのだから、苛立ちや殺意が募っても仕方あるまい。密かに進めていた細々とした計画を捨て、本能のままに殺したくなってしまうのも当然だろう。こうして情けない姿を晒しているわけだが、脱出のための準備は着々と進んでいた。その気になれば今すぐにでも忌々しい拘束を破壊することだって可能だった。

無論、そのような短絡的な行動は避けたい。いくら回りくどくても、相応のステップを踏んだ方が後々が楽なのだから。散々俺を痛めつけてきた脳筋男を殺すのはそのときでいい。

胸中に湧き上がる衝動を抑え込んだ俺は、この暇な時間を利用して考え事に没頭する。

まず、今更ながらジュリアさんの安否についてだ。

彼女も魔法陣の影響下にいたので、俺と同じように拘束されているはずだった。さすがに死んでいるとは思えないので、脱出後にも探さなくてはならない。

ジュリアさんの所在地が分からないから、皆殺しの際に数人だけ残しておいて、情報を得なければ。

まったく、考えれば考えるほどやるが増える。それも必須事項ばかりなので、横着は許されない。

「……ん」

ふと口内に違和感を覚え、唇を尖らせて吐き出す。

ころころと地面を転がったのは、割れた数本の歯だった。殴られた衝撃で折れてしまったらしい。道理で血の味が濃いわけだ。

舌で抜けた歯の状態を確かめながら、俺は目を瞑って休息を取る。



太陽を拝めなくなってから、どれくらいの日数が経過したのだろうか。

石壁と鉄格子に囲まれているので判断し難い。

地下にいると昼夜の感覚はおろか、夢か現実かすら分からなくなってくる。

拷問、尋問、不味い食事、浅い睡眠は、人間の諸々をぶち壊すには効果的な生活サイクルらしい。正直、これほど劣悪な環境での生活なんて初めての経験なので、かなりストレスが溜まってきて

いる。身体を自由に動かせないことがこんなにも辛いとは思わなかった。

それに肉体の損傷もなかなか酷い。

時折、回復薬で大怪我だけは治療されるので死にはしないが、脳筋男の暴力は目を追うことにエスカレートしている。

少し前から導入された水責めにもさつそく飽きていたようなので、そろそろ爪を剥いだり眼球を抉ったりするつもりなんじゃないだろうか。想像するだけで恐ろしいね。何らかの策を打たないと五体満足で生還できなさそうだ。

受けてきた苦痛の数々に肩を竦めつつ、俺は独り静かに笑う。

ようやく求めていた情報が揃い、準備もほぼ万全にまで整ってきた。

脳筋男のいなくなるほんの少しの時間を獅子男との会話に割りき、そこで得た情報を脳内でまとめる。時間だけは腐るほどあったので、いくらでも考えることができた。

数少ない事実を掻き集め、穴があれば憶測で埋める。この作業をひたすら反復して精度を高めていくのだ。それだけで現状がかなり把握できてきた。相応の苦痛を受けた甲斐はあったみたいだね。さて、現在地についての情報をまとめてみよう。

あの獅子男によると、ここは帝都の地下に位置するらしい。

帝都には一度、武闘大会の本戦で訪れた以来だな。女勇者であり同じ日本人であるアシュリーさんと出会ったのもここだった。

しかし、なぜ不死の血統団が帝都地下に居を構えているのか気になったが、そこは濁されてしまった。国の中心に拠点があるなんて、よほど重大な秘密があるのだろう。下手に深入りして機嫌を損ねても面倒なので、それ以上は聞けなかった。

考えられるのは、「帝国と不死の血統団がグルである」、もしくは「不死の血統団が秘密裏に住み着いている」あたりだろうか。

個人的には後者が正解だと信じた。俺が不死の血統団を滅ぼすことは確定しているが、前者の場合、帝国と敵対することになってしまうのだ。さすがに一国を敵に回す真似は避けたいからね。チート能力を駆使すれば不可能なことではないだろうが、国ごと潰すのは今はタイミングが悪い。まあ、この辺りの問題はどうしようもないので、脳裏に留めておく程度にしておこうか。

次に不死の血統団の構成員について。

グループを大雑把に分類すると、地位の高い順から「団長」「幹部」「一般構成員」「下僕」という順になるそうだ。

「下僕」は構成員の術に操られている者を指し、支配の証として眼がピンク色なのが特徴。

「一般構成員」はその名の通り普通のメンバーを表し、人数が最も多く実力に関してはピンキリだそう。諜報活動の大半は一般構成員の仕事とされている。以前、俺が町で出会った者もおそらくこの層にいた人間なのだろう。

「幹部」は不死の血統団の中でも指折りの実力者が揃えられた階級である。グループの実質的な運

営を任されており、全員が特殊能力や優れた技能を備えているという話だ。

ちなみに俺の拷問を担当していた脳筋男は紅牛族という種族で、戦闘部隊のリーダーとして活躍しているらしい。しかも驚いたことに、紅牛族は亜人というより魔族に近い存在なんだそうだ。そんな奴にこれだけ殴られたと考えれば、やたらとダメージが大きいのも納得である。むしろ死ななかったことを褒めてほしい。

あえて自分から明言していなかったが、獅子男本人も幹部なのだろう。直接戦ったというわけではないものの、彼からは強者の風格が感じられる。

そして残された「団長」だが、未だまともな情報を得られていない。獅子男が頑なに説明を拒んだためである。団長に関しては死んでも話さないと断言されてしまったので、正体を探るのは不可能と結論づけた。

まったく、互いに答えるという約束だったのに公平性がないね。拘束された身で強く主張できないのが悲しいところだ。

それでも大まかでも組織構成を聞き出せたのは大きい。要は幹部連中を壊滅させ、その上に君臨する団長を殺せば勝ちなのだ。

臍げながらも標的が判明すると俄然やる気が出る。どうやって殺してやろうかと考えを巡らせているだけで、気分が高揚してどうしようもなくワクワクする始末だった。

しかし、「不死の血統団の目的」という重要な情報がまだ手に入っていない。

それとなく引き出そうと試みても、獅子男がはぐらかすので未だによく分からない状態なのだ。バレても大して問題にならないような質問にのみ答えているような印象を受ける。

まあ、俺も同じようなことをしているので文句は言えないけどね。

(残りは脱出後に聞き出すしかないか)

とりあえず、必要最低限の状況は知ることができた。あとはこの忌々しい拘束を破壊し、受けてきた苦痛を百倍返してプレゼントするだけである。

そろそろ我慢の限界だ。身を振っても全く外れる気配のない鎖と枷は、俺のストレス要因第一位を独走している。椅子も少し前の拷問で壊れてしまい、残骸が部屋の隅に放置されていた。そんな経緯もあって、今の俺は芋虫状態で床に転がされている。

しかし、この不快感もあと少しの辛抱で終わるのだと考えると、いくらか気持ちが楽になった。ひとまず休息でも取っておこう。そう思っただけで目を瞑ろうとしたそのとき、鉄格子の向こうから歩いてくる影が見えた。

誰か判明する前に、鋭い蹴りが飛んでくる。

「おらあ！ 朝だぞ起きてるか」

「おかげさまでな。眠気の吹き飛ぶ清々しいモーニングコールだったよ」

「そりゃよかった。じゃあ、ついでに身体の方も起こしてやるよ！」

俺の顔を蹴ってきた張本人、脳筋男を見上げて俺は苦笑する。

無遠慮な暴力を幾度となく喰らってきたおかげか、これくらいの痛みや流血には動じなくなってきた。いつの間に獲得したのか、スキル欄には〈拷問耐性〉なんて表記があるし、やはり相当な経験を経たと言ってもいいのだろう。そういう意味ではこの牢獄生活も実りのあるものだったのかもしれない。

俺が奇妙なポジティブ思考を発揮していると、脳筋男が目の前に仁王立ちになって宣言した。

「余裕ぶってられるのも今のうちだ。これを見る」

そう言っただけで突き出されたのは大型の片刃斧。黒光りする表面が、その切れ味を物語っている。

なるほど、ついに強行手段に打って出るつもりか。彼の血走った眼から察するに四肢欠損くらいにまで俺を追い込む算段らしい。これは相当に焦っていると見ていいな。獅子男ばかりが俺から情報を得ていることで苛立っているのかもしれない。

俺がどうしたものかと考えていると、脳筋男はさらに付け加える。

「ここまで黙秘を貫く人間は本当に久々だ。さらに、俺の拷問で精神を崩壊させないどころか、皮肉を返す余裕まであると来やがる……」

俺が割と平然としているのも気に食わないそうだ。何から何まで自分勝手な男である。

斧を壁に立てかけた彼は、のっそりと準備運動を始めた。あえて悠長な動きで拷問の開始を遅らせることによって、こちらの恐怖を煽るつもりのようなのだ。

生憎と俺にはそんな小賢しい真似は一切通用しない。脳筋男もそのことに気付いて、伸びをする

動作をゆつくりとしながらもどこことなく気だるげだ。

まあ、成果の得られない作業を延々と続けていればそうなるのも理解できるよ。だから俺は、脳筋男に憐みの意を込めて言う。

「お前もつくづく暇だな」

「組織の意向は絶対だ。それに拷問は俺の専売特許だから仕方ねえんだよ」

軽い嫌味は華麗に受け流された。これから俺の手足を切り落とすと決めたことで、脳筋男にも精神的な余裕が出てきたらしい。さすがは二週間ぶつ続けて拷問を行ってきた男と言うべきか。

精神を乱したままであれば好都合だったのだが、この際仕方ない。いい加減、俺の我慢も限界なのだ。準備も完璧にできたし、そろそろ実行に移そうか。

内心で密かに決心する俺をよそに、脳筋男は嬉々として拷問道具を自慢してくる。

「今日は針を用意したんだ。早速こいつを試してみるか？」

「こちらに拒否権がないのは分かっている」

「いい返事だ」

俺のうんざりとした言葉にも脳筋男は満足そうに頷く。

分厚いグローブを装着したその手には、いつの間にか極太の針が握られていた。少なくとも裁縫では絶対に使わないサイズだと思う。

しかし……恐怖より先に「自分も誰かに使ってみたい」と考えてしまう辺り、俺もおかしいのか

もしれない。いや、これこそが殺人鬼の性か。

「準備が整うまでは少し時間がかかるだろうから、ゆつくり待っていてくれ」

「そうさせてもらうよ」

視線の向こうで火を起こし始めた脳筋男の背中を見ながらニヤリと微笑む。こちらが動けないのをいいことに、かなり隙だらけだな。

悪態は吐いていたが、基本的に俺は従順に拷問を受けてきた。それ故に相手の警戒心も薄れているようだ。

いくら辛抱強い人間でも、気を張り続けるには限界があるからね。目隠しや猿轡が常に外された状態で放置されるようになったのも、この辺りに原因があるかと思われる。

（じゃあ、そろそろ計画を行動に移すか……）

それでは脳筋男が油断している間に、さっさとこの忌々しい拘束を解除しようと思う。

まず俺は汗腺から微量の特殊な酸を分泌して枷を静かに溶かしていく。これによって手足がかなり自由に動かせるようになった。全身に巻きついていて鎖がまだ残っているが、それはひとまず後回しだ。さすがにこれ全部をバラしていると脳筋男に気付かれてしまう。

そつと身体を起こして、足に力を込める。

ここからは反撃の時間だ。

「なあ、このままだと私は一体どうなるんだ？」

「それは俺の決めることじゃないが、お前にとってロクな結末ではないことだけは確かだろうな。それがどうかしたのか？」

「いや、少し気になっただけだ」

俺に背を向けて針の加熱作業に没頭する脳筋男は、こちらの異変に気が付いていない。無論、バシのように工夫はしているから当たり前なだけだね。それでも、このタイミングで不審に思われるとなかなか厄介だったのよかった。

動きを悟られないように細心の注意を払いながら身体を振り、すぐにでも立ち上がれるように準備をしておく。

よし、あとは絶好のタイミングが訪れるのを待つだけである。

(頼むから振り向かないでくれよ……)

相手に先手を取られれば、ほぼ確実に痛手を負うこととなる。そうなると万全な状態でない今の俺は半殺しにされること間違いなしだ。展開としては最悪なケースなので、実現しないことを祈るしかない。

脳筋男の様子を窺いつつ唇を噛む。

「そろそろ自分のことを話す気になったか？」

火加減を調節しながら、脳筋男がぼそりと呟く。

「生憎、口は堅い方だね。私から話すようなことは何一つないさ」

脳筋男の暴力によって俺が吐いた情報はゼロだ。

ついでに言うなら獅子男に教えた情報にも虚実を混ぜておいたので、そちらについても実質的には損害なしと言ってもいいだろう。我ながらここまで完璧な出来である。

それから無事に数分間の沈黙が流れ、ついに、その時がやってきた。

「よし、これくらいいいだろう」

針を十分に炙れたことを確認した脳筋男が立ち上がる。その後ろ姿が彼の足元で焚かれた小さな火に照らされ、牢獄の壁に不気味な影を形作った。

頭から生える二本の立派な角の存在が妙に目立つ。あんなものに突き刺されば、さぞ悶絶することだろう。突進することに特化したかのようなその形状は、見るからに危険極まりない。

(まだだ、最大の隙を見逃すな……)

脳筋男の一举一動を注視し、行動に出るべきタイミングを見計らう。

仮に今飛び出したとしても不意打ちの成功率は高いだろうが、相手の身体能力を考慮するならばと数秒だけでも様子を窺った方がいい。いくら死なない自信があるとはいえ、無駄に攻撃を喰らいたいとは思えないからね。

「ふう、腰が痛てえ。やっぱり俺にはじつとしていることが似合わねえよ」

(……ここだな)

溜まった疲れを吐き出すかのように伸びをし始めた脳筋男。

それを確認した瞬間、俺は脳内で何度もシミュレーションを繰り返していた動作を迷いなく実行する。

動かしづらい足腰と腹筋に力を込めて立ち上がり、そのまま勢いを殺さずに脳筋男に向かって大きく跳躍。身体に捻りを加えながら空中で膝を曲げて狙いをしっかりと定める。

頭上の俺に気付いた様子もない脳筋男は、ちょうど伸びを終えて一息ついていたところだった。あとはもうこちらのものである。

ああ、これから目にするであろう光景を想像して心が躍ってきた。

脳筋男が暢気に呟く。

「そんじゃ、今日も始め——」

「おっと、その発言は却下だ」

身体のをねを利用して繰り出した蹴りを、ちょうど振り向いた脳筋男の顔面に叩き込む。

足の裏から脳筋男の顔が滅茶苦茶に粉碎される感触が伝わってきたことに愉悅を覚えてしまったのはきつと気のせいではないだろう。

俺の全力のドロップキックを喰らった脳筋男は、打ち出されたピンボールのように吹き飛んだ。

屈強な肉体は壁に蜘蛛の巣状の亀裂を走らせながら深くめり込み、その衝撃でせっかく用意していた火と熱した針が床に散乱する。

「今ので昨日の分くらいの憂さ晴らしはできたかな」

俺の激しい動きで半壊した鎖を次々と千切っては捨てていく。何重にもがっちり巻かれていたせいで、こうしていちいち外すのが億劫である。

俺がじゃらじゃらと煩わしい音を鳴らす間に、一つの殺気が肥大化した。

「てめえ、一体どうやって……」

怒気を含んだ低い声。

「知りたいのなら、私をもう一度拘束すればいいさ。ただし——」

瓦礫の山から抜け出した血塗れの脳筋男を一瞥し、口角を微かに上げる。それだけで肌を感じるピリピリとした威圧感が一層強いものとなる。

しかし、俺はそれに臆することもなく言葉を続けた。

「それができればの話だがな……」

「今度は手足をぶった斬って閉じ込めてやるよ」

「フツ、それは楽しみだ……」

むくりと起き上がった脳筋男と対峙する。

俺の放った一撃をまともに喰らったせいにか、こちらを睨む視線が僅かに定まっておらず、動きもどこか緩慢で足元が覚束ない。

蹴りが直撃した顔面は、凄まじい有様だ。

全体が醜く腫れていることに加え、出血量が多すぎるせいでもはや原形が分からなくなっている。

尤も、俺がこれまでに受けてきたダメージと比較すれば微々たるものであるが。

「……くっ！」

さすがに分が悪いと感じたのか、脳筋男が牢屋の出口に向かって走りだした。ただし、逃げだしたわけではない。

彼の伸ばした手の先にあつたのは、無骨なデザインの小振りな斧。なるほど、形勢が不利と判断するや否や武器を手に取りうとするとは、至極当然の判断ではある。

相手が無手と来れば尚更だ。体格差に加えて武器まで獲得すれば、リーチによる優位性は絶対的なものとなる。

だけど、まあ、俺がそんな追撃のチャンスをみすみす逃すはずはないよね。

「そう簡単に武器を取らせるかよ」

石の床が陥没するほどの力で疾走し、サッカーボールを蹴る要領で脳筋男の左太腿を破壊する。

うん、今のは拷問一日分くらいの仕返しができた感じかな。

脳筋男が痛みで怯んだ隙を利用して、さらにボディブローをお見舞いしてやった。

心地よく響いた音になんとなく満足する。

「次でフィニッシュにしてやろう」

身体をくの字に折った巨体に向かってとどめのアッパーカットを決めようとしたとき、唐突な咆哮が鼓膜を乱暴に叩いた。

「——くそがああああ!!」

「っ!？」

憤怒を纏った叫びはビリビリと空気を震わし、俺の思惑を瞬間的に阻害する。硬直した手足は俺の意思に反して全く動かない。

今の耳障りな声には何やら妙な効果が付与されていたらしい。

つたく、実に忌々しい悪足掻きだ。

高速で接近してくる大きな拳を見て、思わず舌打ちが出そうになった。

「頭蓋を撒き散らして死にやがれっ！」

気合の入った言葉と共に頭部を殴られる。その衝撃は凄まじく、これまでの拷問で脳筋男がいかに手加減をしていたかがよく分かるものだった。

自らの勝利を確信した彼は、満面の笑みを浮かべている。確かに普通の人間がこれを喰らえば、ほぼ間違いなく頭蓋を撒き散らすことになっていた。

しかし、残念ながら俺という存在は普通とはかけ離れているわけで……

「その痛みはもう〈学習〉したよ」

一步大きく踏み込み、驚愕する脳筋男の顔面を裏拳で殴り返す。攻撃を受けたことで硬直が解けたのは好都合だったな。

というか、これくらいで仕留められると思われていたのなら心外だね。地面を砕きながら転

がつていく拷問官の無様な様子を見ながら口内の血を吐き捨てる。

（そんじゃ、今度こそ終わらせるか）

こいつ一人に時間をかけられるほど俺は暇ではない。まだたくさんの獲物が俺の登場を待っているだろうからね。

手近にあった鉄格子を数本だけ引き千切り、振ってまとめることで即席の頑丈な鈍器を作製する。

あとは脳筋男に気の済むまでこれを振り下ろすだけでいいだろう。

「どうした、私の手足を斬るんじゃないかったのか？」

既に意識を失ってしまっているのか、俺の声に反応する気配はない。

見た目は厳ついのに、防御力は案外低いのかな。こんな奴が幹部を務めることのできるグループであると考ええると、不死の血統団の力を買い被りすぎていたのかもね。本音を言ってしまうと、かなり期待外れな感じだ。

俺は肩を竦めて溜息を吐く。

そして狭い牢獄の一角で痙攣している脳筋男のもとまで歩を進め、俺は歪な形をした凶器でひたすら殴打してやった。

攻撃を繰り返すこと暫し。

完全に動かなくなつた脳筋男を足で仰向けにする。

「ふう、これだけやれば十分だろ」

何とも形容し難い状態となつたその姿からは、あの威風堂々といった雰囲気は一切感じ取ることができない。

まあ、借りは無事返すことができたから一応は満足できたかな。

興味の対象ではなくなつたソレから視線を外し、血に染まつた鉄格子製の鈍器を肩に担ぐ。さつさと用事を片付けて元の生活に戻りたいものだ。

「そろそろ行くか……」

「ほう、どこへだ？」

俺が牢屋から脱出しようとしたところで聞こえてきた冷たい声。

部屋の入入り口に現れたのは、尋問担当の獅子男だつた。

暗闇に佇む彼は、黒銀の片刃刀を携えて静かな威圧感を放ちながら俺を見つめている。その姿からは少しの油断や隙も窺うことができず、まさしく「戦士」という言葉の似合う風格だ。

これは完全に、倒すのが面倒なパターンだよな。

「妙に騒がしいと思えば、やはりお前だつたか。いつかはこうなると予想はしていたが、よりによって俺がいない間にやってくれるとは何とも間が悪い」

「ちようど外の空気が恋しくなっていた頃でな。私の願いを聞き入れてくれなかったお仲間さんには眠ってもらうことにしたよ」

そう言つて足元の脳筋男を踏みつける。

こういった挑発で、獅子男が少しでも平常心を失ってくればこちらとしては儲けものである。嫌味たらしい笑みも付け加えて相手の反応を待つ。

「本来の力が出せない狭い場所では油断すると常日頃から忠告していたのに……これだから能無しと揶揄されるのだろうな」

しかし、獅子男は俺の期待するようなリアクションを見せてはくれなかった。脳筋男を侮蔑の念を込めた視線で睨んだだけで、感情の揺れがほとんど感じられない。

仲間がこんな有様だというのに冷静そのものである。

（俺から仕掛けるか）

抜き身の刀を両手で構える獅子男を説き伏せることは不可能。

そしてこの間にも鉄格子の中に入ってこない相手の用心深さから考えると、後手に回るだけ無駄であるような気がする。

また増援が来る可能性も否定できないので、時間を稼がれるのは非常にまずい。

短期決戦を望むのなら、俺の方から攻めるのが妥当だと言える。

「やはりこれが最善策か……」

即席の棍棒こんぼうを握り直し、血塗れの先端を獅子男に向ける。

「蛮勇気取りか？ ……いや、それも一つの覚悟の形か。正々堂々受けて立とう」

こちらの意を汲んでくれたのか、獅子男も晴れやかな笑顔で刀の刃先を向けてきた。

クールな心の中にもやはり戦闘本能を持ち合わせているらしい。純粋な命の駆け引きが楽しみで仕方ないようだ。

牢屋の外にもかかわらず、俺に向かって勢いよく腕を振り下ろした彼を見てそう感じた。

……あれ、牢屋の外？

気付いたときには既に身体が動いていた。

反射的に回避できた不可視の何かは俺の upper body を掠めるように通過し、背後の壁に大きな斬跡を刻み込んだ。

直撃していれば上半身と下半身がお別れしていたほどの威力だったな。

唐突な一撃に冷や汗を掻きつつ、獅子男へ突進する。遠距離から攻撃され続けているうちは、何の勝機も見出すことができない。多少のダメージは度外視で殺してやるよ。

「今の斬撃を避けるか。では、これならどうだ？」

獅子男は俺の接近に動じるどころか、寧ろ嬉々とした様子で再度刀を振ってくる。ただし今回は目にも留まらぬ速度による連続攻撃だ。

（何が正々堂々だったっの。距離を詰めたら絶対にぶん殴ってやる……）

前方から迫る十字型の何かを、ジュリアさんとの戦闘で獲得した回避技術と鍛え上げた「直感」

を駆使してやり過ぎ、絶妙なタイミングで飛んできた第二陣以降の攻撃も鉄格子の束で無理やり受け流す。

かなり強引なやり方だが、だからこそ最短距離で進めた。

進路上に落ちていた脳筋男の斧を回収しながら獅子男へと跳びかかる。

あとは斧か鉄格子を奴の頭に叩きつけるだけで終了だ。

「喰らいやがれ」

「舐めるな」

しかし、全力で振り下ろした鉄格子の軌道に合わせて刀が斬り上げられた。魔力を含んだその刃はいとも簡単に鉄の棒を切断し、そのまま勢いを殺さずに俺へと接近する。

おっと、やはりそう来たか。魔力の高まりを肌で感じていたので、このパターンへの対処方法も予め考えてある。

顔を僅かに傾けて避ける。頬を深く斬りつけられたようだが、大事には至らない程度なので気にしない。

「なっ!？」

この行動にはさすがの獅子男も意表を突かれたらしく、一瞬だけ動きが鈍った。彼の刀は頭上に掲げられた状態で固まっている。

それはあまりにも隙だらけな姿であった。

もちろんそんな好機を逃がす俺ではない。ここで仕留めなければ、あまり使いたくない手段[・]を使う必要性が出てくるからだ。

(頼むから死んでくれよ……!)

獅子男の目の前に片足で着地し、俺はもう片方の手に持つ斧を横薙ぎに振り抜いた。

「……」

数秒の静寂。

そんな時間に終わりを告げたのは、何か重たいモノが床に落ちた音と大量の液体が噴出する音だった。

血生臭い空間を見渡し、落下音の正体を探る。

「……は？」

血溜まりに沈んでいたのは、斧を握った俺の腕だった。

「う、腕が……」

「魔法の属性付与。肉体は飛燕^{ひえん}の如き素早さを獲得し、装備している武器は一時的に切れ味を大幅に上昇させる。その気になれば、先ほどのように風の刃を飛ばすこともできる。今の反撃はなかなかいい動きだったが、俺の攻撃速度を甘く見すぎだ」

獅子男を殺すはずだったカウンターは寸前のところで失敗した。

持っていた斧は俺の腕ごと飛ばされ、部屋の隅に転がっている。暗い牢屋で妙な存在感を放つソ

レは、なんだか現実離れた光景のように思えた。

「よそ見をしている暇なんてあるのか？」

「チッ……!!」

魔力を帯びた鋭い斬撃をバックステップで避ける。

腹の辺りから痛みと共に何かがじわりと滲_{にじ}んできているが、そんなものを気にする余裕なんてない。今は遠慮なく次々と斬り込んでくる獅子男の動きに集中することで精一杯なのだ。

徐々に後退させられていることを自覚しながらも必死に身体を動かす。

「ほう、ここまで粘る輩_{やぐ}はなかなかいないぞ？ 確か十数年前に手合わせをした剛護_{ごうご}の騎士でもこれほどしつこくなかったな」

「そんなこと知るかよっ」

獅子男の態度にイラつきながらも、刀を屈んで回避。同時にハイキックをお見舞いする。

しかし、頭蓋を砕く威力があろうその一撃も刀背で弾かれ、お返しとばかりに左足の肉を一部削ぎ落とされた。

そこからさらに追撃が襲いかかってきたのでたまらず距離を取る。

今は少しでも反応が遅れていたら、またもやどこかを斬り飛ばされていた。

大量の血液を流出し始めた足の状態を確かめつつ額の汗を拭_{ぬぐ}う。

「もう限界か？ 実に拍子抜けだな」

獅子男が落胆したような口調で呟く。

「……」

そんな彼の姿をつぶさに観察して感じ取れたのは、微かな油断。

これは俺にとって非常にいい傾向だ。

殺し合いは、一方の最期_{さいご}が訪れるまで何が起こるか分からない。世の中にはミンチになっても復活するような化け物があるくらいだからね。

まあ、何はともあれ思わぬ痛手を受けてしまったが、なかなか大きいリターンを得ることができた。これで奴を殺害するまでの布石はほぼ全て出揃い、残る要素は仕掛けるタイミングと俺自身の誤誘導_{ミスリード}のみである。

水面下で傾きつつある優劣関係に、俺は内心ほくそ笑む。

3 脱獄殺人鬼

「逃げることに思考を割かれすぎだな。俺の行動を逐一把握し続けた方がいいんじゃないか？」
「ぐっ……」

叱責^{しつせき}の声と同時に大きな切れ目が脇腹に作られる。

尤も、そんな傷くらいでは大して驚くこともない。俺の全身には既に重軽症問わず様々な切創^{せつそう}が刻まれているからだ。着ていた服もスタボロな上に血で汚れきっている。衛生的によろしくない状態なので早く着替えたいものだ。

鎖骨の辺りを掠めた刀を目で追いながらそんなことを考える。

狭い牢屋の中での戦いは、開始してからそれなりの時間が経過していた。

とは言っても、俺が追いつめられている状況に変化はない。

獅子男が刀を振り、それを俺がひたすら避けまくるだけである。苦^{くる}し紛^{まぎ}れに行っていたカウンターも無意味だと分かったので途中から断念している。

本当に強いよこの人。

場に変化が訪れたのは、そこからさらに数分後のことだ。

突然獅子男が足を止め、暗い瞳で俺のことを睨^{にら}んできた。

「多少は楽しめるかと思つて期待していたが、やはり時間の無駄だったようだ。貴様程度の實力では俺の心を満たすことはできない。もうじき医療班も来るだろうから、さっさと瀕死^{ひんし}にさせてやる」

おっと、俺の力不足で失望させてしまったらしい。

濃密な魔力を纏い始めた獅子男を見て嘆息する。

彼の周囲^{あお}で蒼い風が吹き荒れ、鉄格子をガタガタと乱暴に揺らす。近づくとすら憚^{はば}られるよう

な張り詰めた雰囲気を生み出すその姿は、まさに獠猛^{ろうもう}な獣のようである。

「―――〈魔刺貫^{ましかん}〉」

（うおっ、刺突^{しど}か！）

そんな本気モードの獅子男は、刀を後ろに引きながら突っ込んできた。

うーん、一点集中型の攻撃か。さすがにこれは喰らいたくない。

驚異的な加速で迫る殺意の塊を見てそう判断し、すぐに後ずさ……れない？

（しまった、追い詰められていたか!）

背に当たった硬くて冷たい壁の感触に悪態を吐きそうになる。

俺が立っていたのは、ちょうど部屋^{へや}の角に当たる位置。

どうやら知らないうちに逃げ場のない場所へと誘導されていたらしい。ただ単純に斬りかかってきていたわけではなかったということだね。

はあ、これは覚悟を決めないと駄目なパターンかあ。

眼前まで接近していた獅子男を確認してから、俺は歯を食いしばる。

「―――っ！」

最初に襲ってきたのは激しい胸の痛み。

勢いを殺すことなく突き出された刀は俺の身体を容易に貫き、刃に付加されていたと思われる風魔法で体内を徹底的に破壊してきやがった。

たぶん心臓や肺辺りはグチャグチャになっっている気がする。俺のことを瀕死に言うっていたが、これは明らかに殺す気だっただろ。

俺の返り血でその身を真っ赤に染めていく獅子男に、俺は恨みの視線を送る。

「やはり死には至らなかったか。しばし待てば医療班が来るから大人しくしてろ」

俺を刀で壁に縫いつけた張本人は平然とそう言っただけだ。

（つた、ふざけた態度を取りやがって……）

マグマのように煮え滾る怒りの感情を理性で抑えつつ、思考を総動員して周囲の状況把握に努める。

ここまで来れば、あとは詰みの手を打つだけなのだ。最後まで心を動かされずに進めなくては。

手の届く範囲にはこれと言った武器は見当たらない。胸に刺さる刀のせいで俺の動きは大きく制限されている。

そして、この暗い牢屋の中で早急に始末しなければならないのは、目の前にいる獅子男ただ一人のみ。

俺の取るべき行動は、既に提示されているようなものである。

「情報通り強力な生命力のようだな。道理であの馬鹿の暴力にも耐えきれたわけだ。この調子ならもう少し痛めつけても——っ!？」

至近距離で悠々と語り続ける獅子男の首を渾身の力でつかむ。いくら俺が死にかけだからって隙

だらけなんだよこの野郎。

俺は目を見開き、慌てた様子で刀を引き抜こうとする獅子男を嘲笑する。

「やっとなつかまえた」

4 潜む伏兵

「な、なぜ……」

「それは何についての疑問なのだろう？ 内臓を完璧に破壊し、再起不能レベルの致命傷を与えたはずの私が今こうしてお前の首を絞めていることに對してか？ それとも、早く苦しみから抜け出したいのにもかかわらず全身に力が上手く入らないことの理由が知りたいのか？ まあ、なんだっ正しい。せっかくだから一から懇切丁寧に教えてやるよ」

苦悶の表情でもがく獅子男を持ち上げながらゆっくりと話す。

彼の手には俺の胸から生える刀の柄が握られており、口から血を流しつつもそれを必死で引き抜こうとしているようだ。

武器を持たないまま暴れるよりも利口だと思う。敵ながら非常に賢い判断だ。この状況でもまだ

冷静さを保てるという点は評価できるね。

「まず、どうして私が平気で喋っていられるのか。これは簡単な話で、体内に忠実なスライムを寄生させているからなんだよ」

この言葉を聞いた途端、獅子男が怪訝な顔をした。

かなりの嫌悪感を抱かなければ、こんなリアクションはできないんじゃないだろうか。

「ちよつとした実験の一環でね、宿主^{やどめし}の管理下でどれだけスライムが体に馴染^{なじ}むかというのを一度試してみたかったんだ。お前やあそこにくたばっている男の協力もあっていい結果を得ることができたよ。それについては感謝している」

「……ギ……ギギツ……！」

パラノイアは俺の万能兵器的なポジションだが、歴^{れき}とした魔物である。

それ故に痛みを感じれば動きは鈍り、衝撃を受ければ怯^{おそ}んだりもする。これはパワードスーツとなつているときにも当てはまることなのだ。

俺としてはこの欠点を可能な限り克服させておきたかった。

そこで思いついたのが、今回の拉致を利用する方法ということだね。

「数日かけてスライムを体内の隅々にまで行き渡らせ、私と感覚を共有できるようにする。そこからは実に簡単な作業だった。何があつたかはお前が一番知っているんじゃないのかな？ ……そう、拷問と尋問の日々だよ」

「ガッ……!？」

脳筋男から受けた痛みは寸分違わずにパラノイアへと伝わっていた。つまり、俺と一緒に十数日間の苦痛を経験したということだ。そこから学んだ全てをパラノイアは自己の糧^{かて}として吸収している。

「時間だけは十分にあつたからな、耐えることを学んだ私のスライムは見事なまでに成長してくれた。ついでに言っておくと私自身もスライムの影響を受けた所^せ為^いで肉体が強化された。これぞまさに持ちつ持たれつの関^{かん}……って、話は最後まで聞けよ」

説明の途中だというのに、獅子男が俺の体内から刀を引っ張り出した。

さっきからずっと彼が頑張つて力を引き抜こうとしていたのを知りつつも、あえてスルーしていた俺の優しさを無駄にするなんて酷い奴だ。

刀を見て愕然^{がくぜん}としているその姿には一切の同情もできない。

「……お、れの……刀が……」

彼が持っている刀は、もはや鉄くずと表現すべき見た目の何かだった。

柄より先の部分から白煙を上げ、散々俺の手を煩^{わづ}わせた黒銀色の刃はグズグズに溶けて使い物にならないような有様となっている。

事情を知らない者からすれば不可解すぎて訳が分からないよね。

まあ、首を絞められながらも一応は武器を手にとることができた獅子男の根性に免じ、この現象

についても説明してあげることにした。

「スライムが私に寄生している間は、その能力の一部を行使することができるんだよ。その力で生成した酸を体内で分泌し、お前の刀を溶かしてやった。ちなみに先ほどから身体の自由が利きづらと思うが、それは私の血液に含ませていた毒が原因なんだ。遅効性で時間経過によって気化する。症状として筋肉弛緩の様相を呈する。この戦闘が始まってから私の垂れ流した血にはこの毒がずっと混入されていたというわけさ。これがどういうことか理解できるか？ 私を斬りつけて流血させた時点でお前の敗北は……んー、本当に他人の話を最後まで聞くのが苦手みたいだね」

いつの間にか抵抗を止め、呼吸を放棄していた獅子男を床に投げ捨てる。

会話に夢中になっていたせいで力加減を間違ったのか、それとも単に長時間絞め続けていたことによる窒息か。

まあ、どっちでもいいね。そこまで興味のあることではないし。

「もう治してもいいよ」

誰もいない室内でそう呟くと、肉の焼けるような音と共に俺の全身の傷が癒えていく。俺の従順な手下であるパラノイアによる回復能力である。

おお、痛みが引くだけで随分と動きやすくなったな。

軽くなった足取りで牢屋の一角に移動する。

「あーあ、こんな所まで飛んじやって……ていうか、ちょっと重たいな」

血の池状態の床を見て溜息を吐く。

そして中心に斬り飛ばされていた腕を拾い上げて肩の切断面に押しつけた。無事にくっつくか心配だったが、難なく成功したのを確認して安心する。

いやあ、本当にパラノイア様々だね。こんなあつさりと全快できるとは思わなかった。

(さて、準備も整ったことだし始めますかー)

せっかくなのだから派手な逆襲をぶちかましてやるよ。

ここからはサーチアンドデストロイで行動してやるさ。パラノイアもかなりご立腹のようなので、存分に活躍してもらうことにしよう。

「蹂躪せよ——パラノイア」

さあ、宴の始まりだ。

5 報復の宴

「おお、パラノイアは特定箇所に密集させることもできるんだ。うん、なかなか面白いアイデアだと思うよ。ありがとう、今後の参考にさせてもらおうよ」